都名所圖會

後玄武
再刻

6

都名所圖會巻之六目錄

後元武

菩提瀧
岩屋山
小野道風社
冠石

紫野大徳寺
今宮社
やすらひ祭
常盤前古跡

義經誕生水
舟岡山
雲林院
蓮臺寺

今宮御旅
金山天王寺
紅梅殿
七の社

清和院
立本寺
焔魔堂
釋迦堂

引接寺
轉法輪寺
七本松
芝居

北野天滿宮
内野遊女町
東向觀音
影向松

太閤茶湯旧地
願成就寺
平野社
紙屋川

金閣寺
衣笠山
鏡石
等持院

芙蓉池
龍安寺 鴛鴦
眞如寺
妙心寺

双岡
兼好古跡
法金剛院
西光菴

御室仁和寺
花盛圖
大内山
鳴瀧妙光寺

印金堂
泉谷法藏寺
西壽寺
般若寺

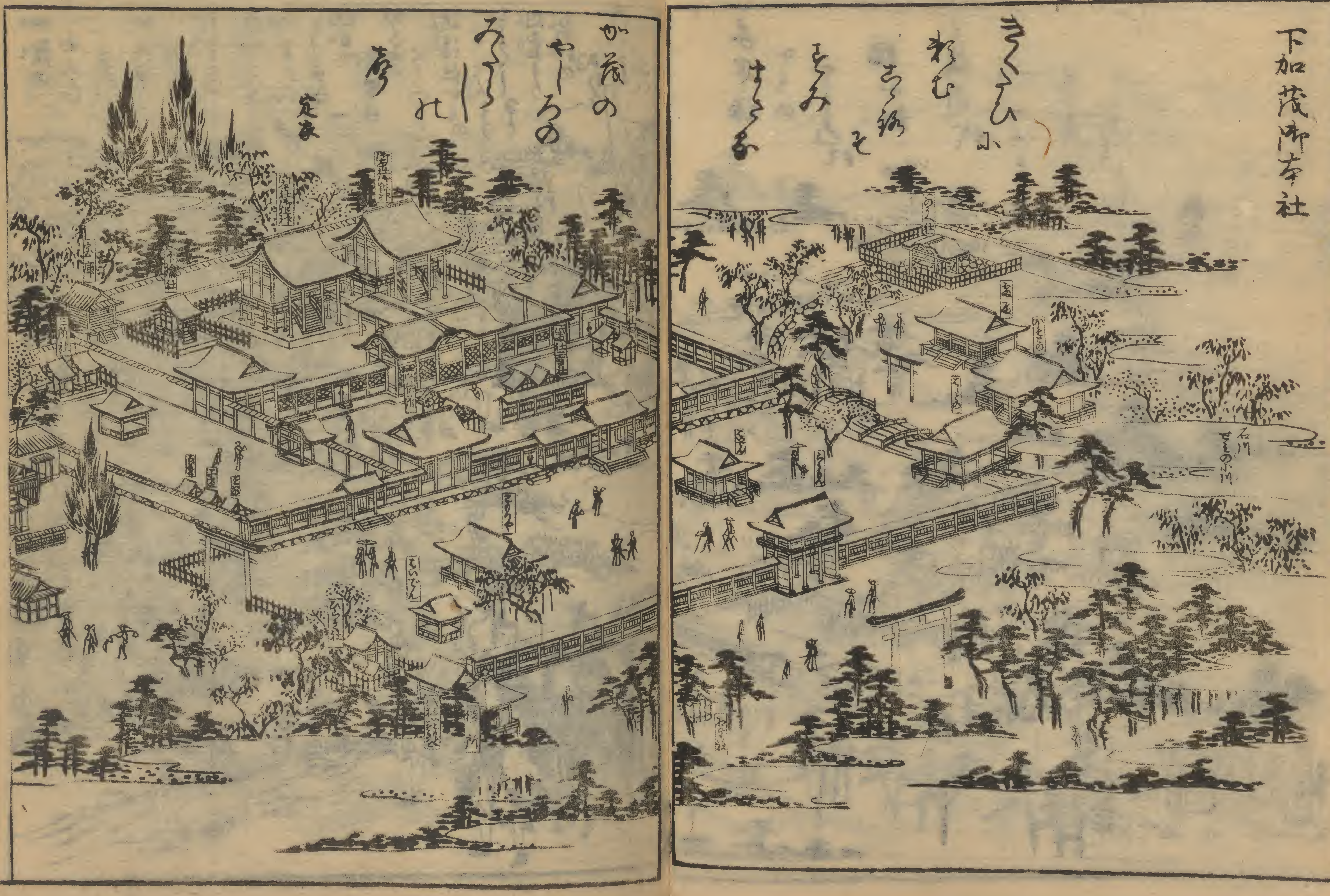
三宝寺
五智如來
宅魔塚
平岡八幡宮

梅畑善妙寺
栂尾專山寺
槙尾西明寺
高雄神護寺

清瀧川
地藏院 紅葉名所


楢の小川ハ
御手洗川の
一名にして
うしろを
流るゝ
細川也
新勅撰
風そよく
ならの
小川の
夕暮ハ
みそきそ
夏の
しるし
なりけり
家隆


下加茂河合社
千早振
かもの
やしろの
姫小松
よろつ代
ふるとも
色はかはらし
敏行
経所



下加茂御本社
加茂の
やしろの
みたらし
定家

葵のあふひまつりハ
四月中の酉の日なり
人皇三十代
欽明天皇の
御宇よりはじまる
此日ハ奉幣使
并くわんぐうつかい
近衛使のちんそう
ちよくしなど
内裏より
祭礼の式ある
御くるまなど

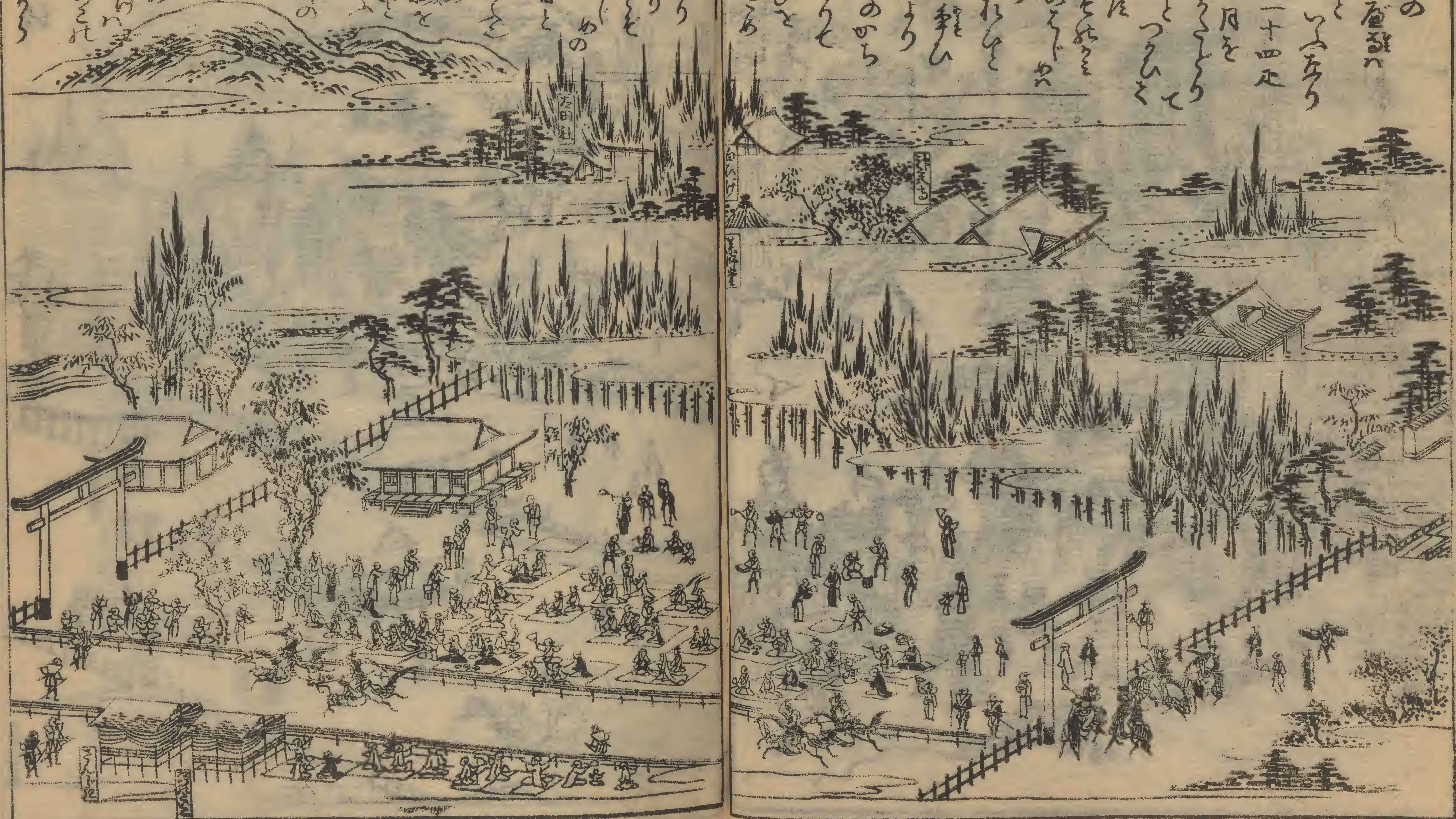


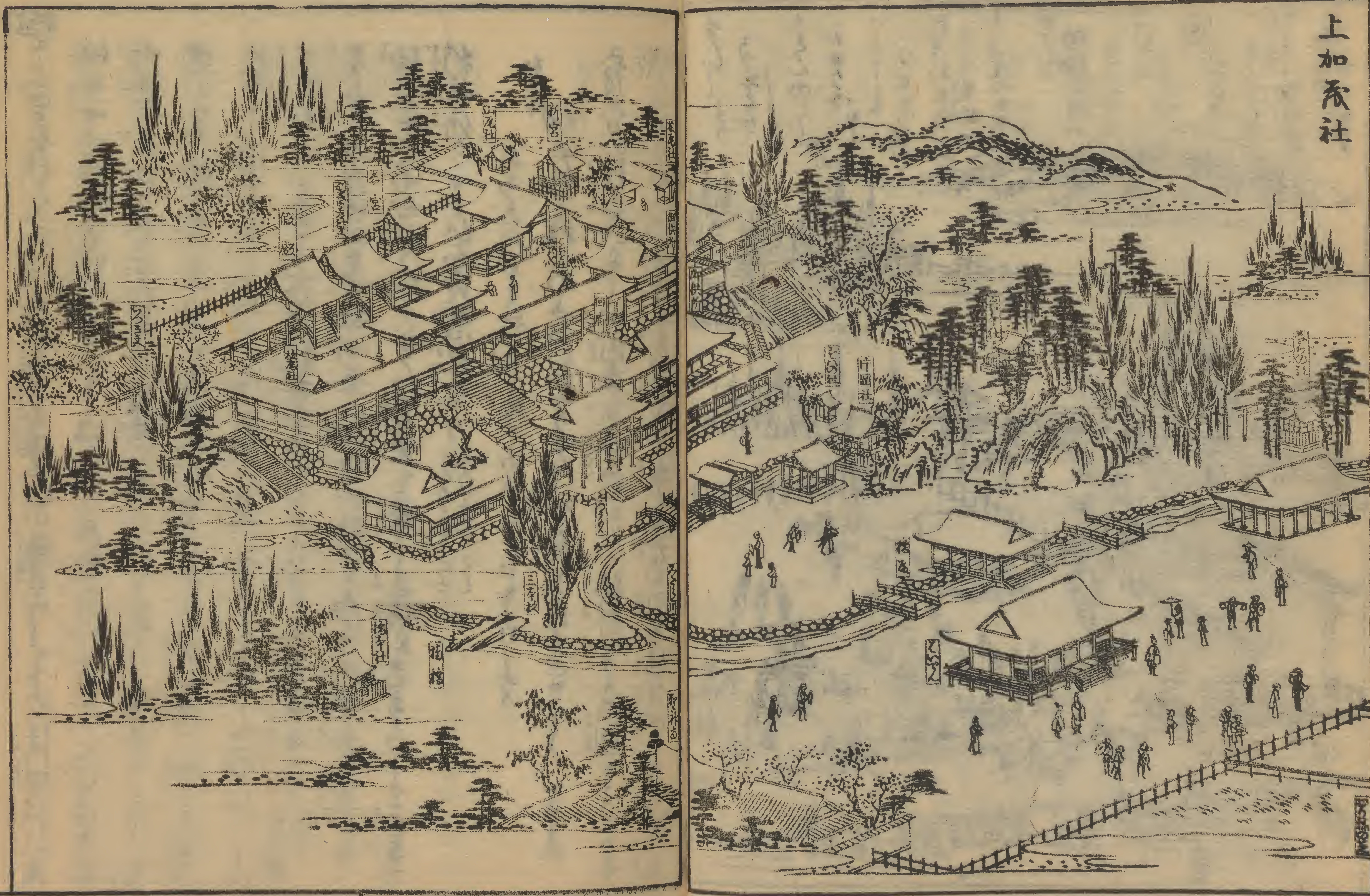
ぜんのまう
しげう
具弁わたりての
り駅のみ
ちうまう
風雅
ことろかづら
まさ
二条より
かをそへ
いくらら
へぬるか
ものの
これえ
後一條前
関白



五月五日の
くらべ馬ハ
まそつひと いふあり
むまやど 二十四疋
一と条の月を くらべて
左右とくろとつがひて
はせらるゝ それを
競馬のことハ
さきとる ふれひて
御くらひ乗手ひ
ありしより
此けいるのかち
まけふようそ
御くらひを さぶる

あひしより
るす地とり しるぞ
うきんのそじ めの
吉押りの日と
いふこしも
此日とりて
又月朔日の 足揃を
おこそつらひと いふ
きられ
姓名法師の
うたに
らちの うちに
競べ馬の
かちまけは
おほかた地のそれ
むちの うちから




上加茂社
新宮
山尾社
若宮
假殿
番所
片岡社

鴨下上皇太神宮の御社ハ天武天皇白鳳六年の造営にして下の社御祖の神ハ加茂健角命の御娘玉依姫にてまします此にある時瀬見の小河のほとりに遊びたまひしに丹塗の矢ながれ来りし故拾ひとりて床のうへにさしおき給ひて孕身となり終に神のごとき御子をうけ給ふ一日里人をあつめ宴をなし給ひ其の男子にむかひ汝が父とおもはん人にこの盃をあたへよとのたまへば盃を虚空になげあげ神となりてそれ天に昇りぬ是なん上の社別雷太神宮なり丹塗の矢ハ火雷命なり 松尾大明神是なり

葵祭ハ卯月中の酉日欽明帝の御宇に始り大内より御車出て公卿あまた騎るなどひろく紋をつけ舞楽を奏し其儀式厳重にして美麗の行粧他にすぐれ殊に祭礼なり まつりとぞいふハあふひ祭のこと

新古今

みあれにまゐりて社の司をのぞみけるにかなはざりければ

頼みあれし神よあふひのかゝりせは何に頼みをかけてたのまし　加茂重保

五月五日の競馬ハいにしへ大内裏武徳殿にて騎射れけるを此例にならひとりてや朝には其日装束を着し左右に別て勝負を決する場のた

ありしより中にて落るとなにおそれけるとぞ抑六月十九日より晦日までハ夏越祓として御手洗川に道俗諸人群参す晦日にハ上鴨の神前において猿楽あり

新古今

読みをとりけみたらしの水の面にうつる影こそ頼もしきかな

此ごろハ加茂へまうでて人の人にみえるといへり

日蔭山二葉山ハ上鴨神座の東にありて御生山ハ別名なり石川瀬見の小川鴨の糺川をすべて皆みたらし川とよぶとかや

続古今

君の代も我世もはたえし石川や瀬見の小川の絶じとおもへハ　鎌倉右大臣

家集

降雪ハみそらに川に絶えてきにぞすみける濱乃鶴　定家

続後撰

さゝれ石鴨の糺川のそのよとおもへハ久しき世々の末ぞ　前太政大臣

岩本橋本の社ハ住吉和哥の二神にして業平實方の化現なりとも言傳ふ古記にいわく平安の京ハ百王不易の都なり東に厳神あり西に猛霊ありあるハ厳神ハ鴨太神宮なり猛霊ハ松尾の霊社是なり二神の鎮護によりて万代平安の福を崇めるも此御神の威徳なりとぞ


松ヶ崎
ちとせふる松の崎にはむれゐつゝたづさへあそぶ心あるらし
元輔
本涌寺

松崎涌泉寺ハ開基日生上人にして日蓮宗流なり天正年中に法華談林
の学室とせられしが影響ハ日像上人はじめてひろめ給ひし所にして同宗なり
毎歳七月十六日堂のまへにて此里の老若男女うちまじり題目にあはせ
念仏めかしく拍子とり踊りて狂ふなり是なん松崎の題目をどりとぞ
名付る其夜ハしろの山にむかひて妙法の二字を焼火に點じ大文字
會の送火とせらるゝなり
御菩薩池ハ幡枝村南にありて傍に地蔵堂あり平相国清盛の代西光
法師がいとなみし六地蔵廻りの其一なり
市原の普陀洛寺ハいにしへ清原深養父の幽棲しておはしゝ舊地ハ是より
丑寅の方にて堂の跡といへり後白河上皇大原の女院を訪ひ給ひて此
所を通り普陀洛寺に御幸のことあり庭に小野小町四位少将
の墓ありはるる人市原野を通りしにさゝれ一むら生ける也けるとぞ
秋風の吹くにつけてもあなめあなめ小野とはいはじ薄生ひけり
小野小町

御菩薩池

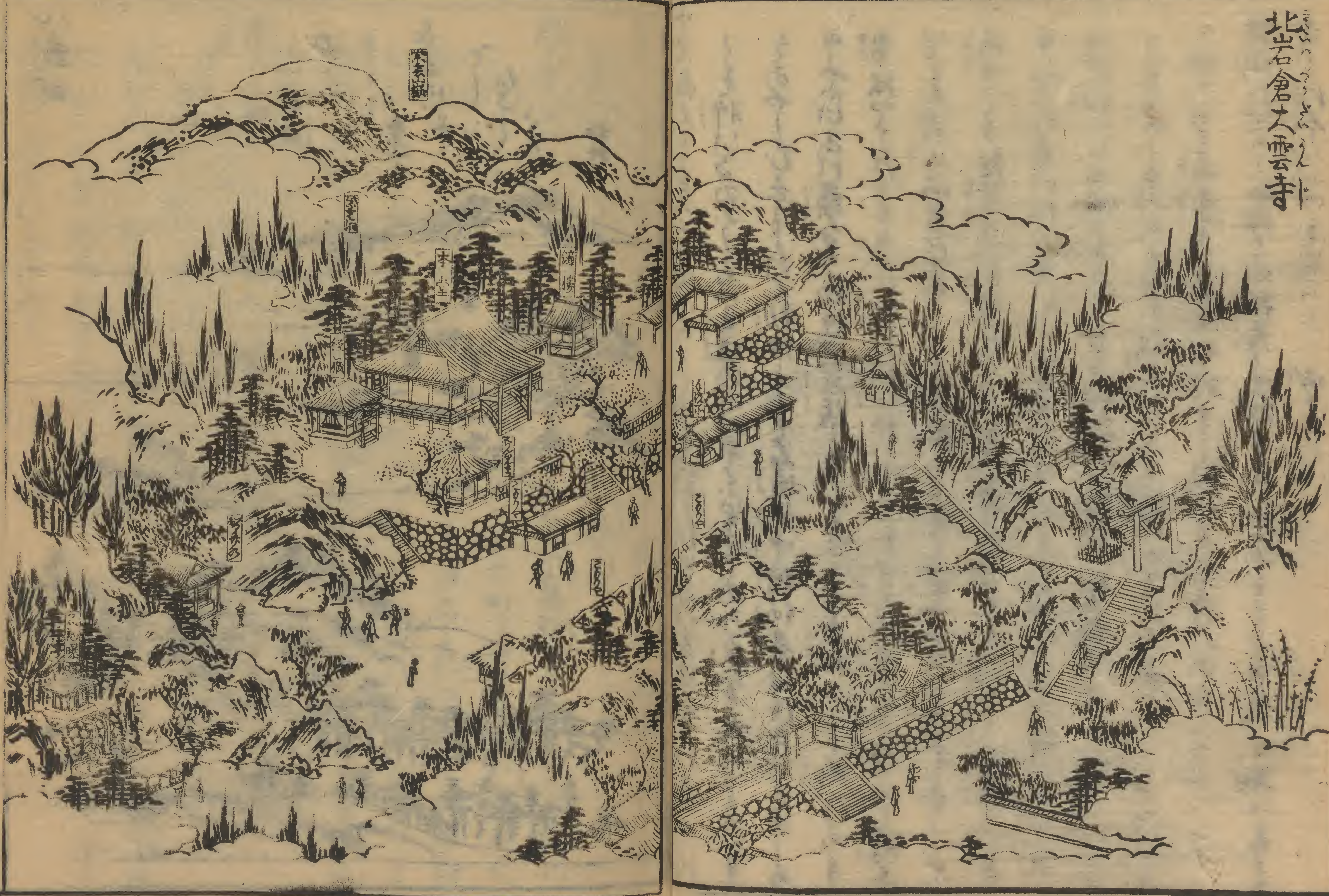


市原小町寺



小名藏大宅寺ハ天台宗にして本尊ハ聖観世音の立像なり行基乃作
しかぞ称せるのそのはじめハ王城の北にあたりそのたつひく所あり流人を
をあやしむ云ぞよりて勅使として右近衛中将何某を遣せしめ
ぬふに此山の嶺なり勅使不思議におもひのありし急ぎしてのぼり
香炉つくられたる老尼現れて曰此地ハ古より観世音降臨の霊地にして峰に
いたるに異香四方に薫じたる霊嶽あり是を窺ひ見るに音楽を奏して
其中より観世音の光明赫々とかゞやける尊體を拝して此地に伽藍をたてそ
ゆゑに行基に作らしめ給ひし尊像を本尊とする大宝の勅額ハ詔によりて
佐理卿筆を染給ひしなり（今本堂にかゝる是也）開基ハ智有僧正なり（僧叔書也）（六本）
を岩藏といふハいにしへ詔ありて王城の四方に石藏といふ所を立て経王
を納めらる其第一なり又石座明神ましませば是を岩藏の名あるなり
八塩岡ハむかしゆかしくの楓茂りて秋のころハ紅葉ところ蜀錦を翻すにことならず
あらそ今ハ小野の尾陰にかくしける

北岩倉大雲寺



八盥図

之本
岩くらや八しほの滝このこゝち紫を長谷川にとしひかしくる

西行

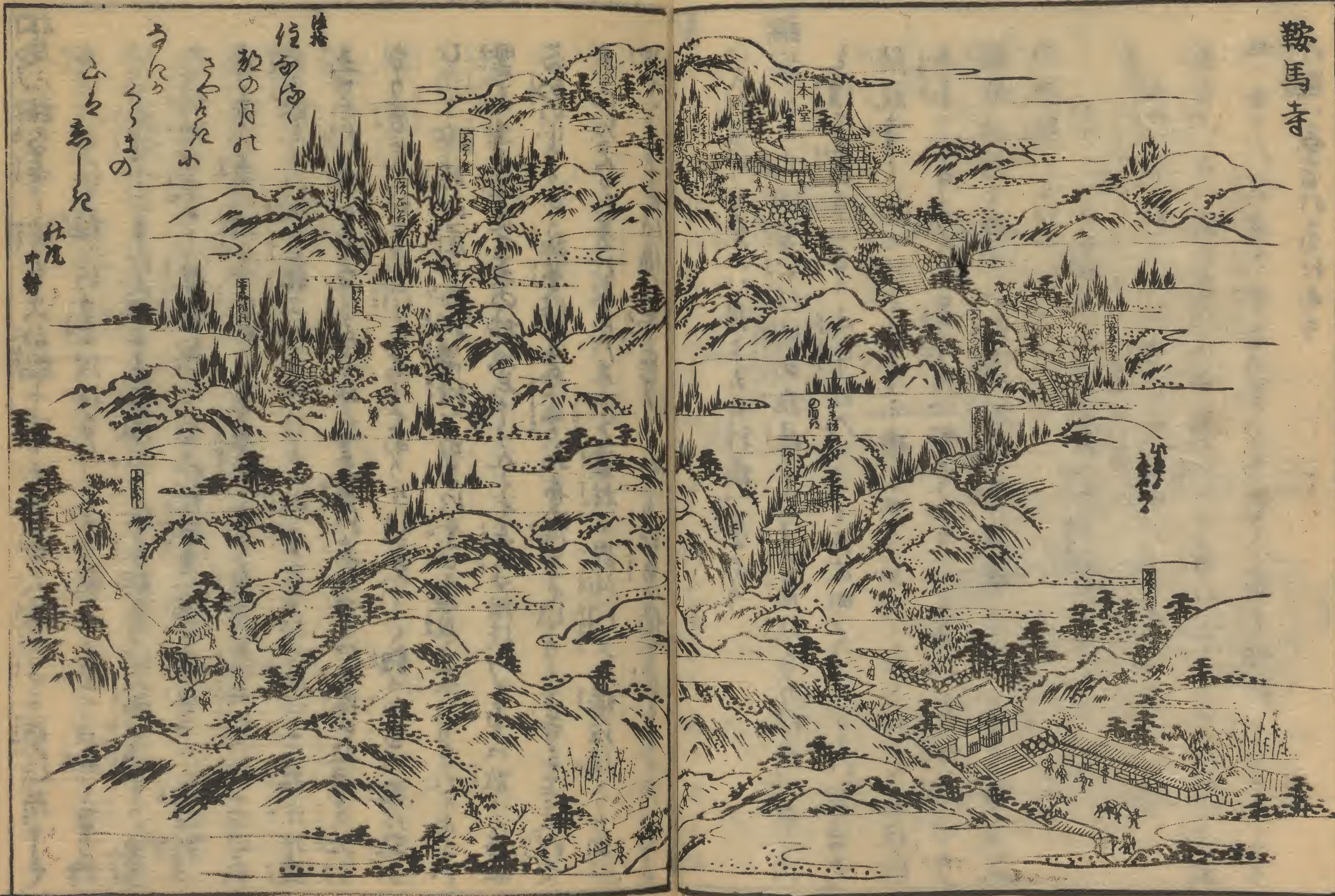


長谷八幡宮ハ惟仁親王の勧請しまふ所也長谷花園中村三郷の氏神にして祭ハ八月十五日神輿一基あり
朗詠谷ハ大納言公任卿の幽居しまふ旧跡なり此所ハ長谷川を隔て北のかたなる山中に入ること凡六町ばかりにして残るて解脱寺といふ旧地あり今に礎石のこり侍るこれ加のて公任卿出家しまふとぞ是より一町ばかり北にあたりて一平地あり彼卿此所に住みひ和漢朗詠集を撰しまひしとなり又御所谷ともいふ

後拾遺
世をそむきて長谷に住侍りける比入道中将のもとより
谷風にならはしそうらん私ハやくすまふしその風 公任

長谷川ハ八塩の岳より流れ出て長谷村の中を西へながれ岩倉大雲寺のあたりをめぐりて幡枝にいたりまふ
花園ハ長谷の南にあり

鞍馬寺

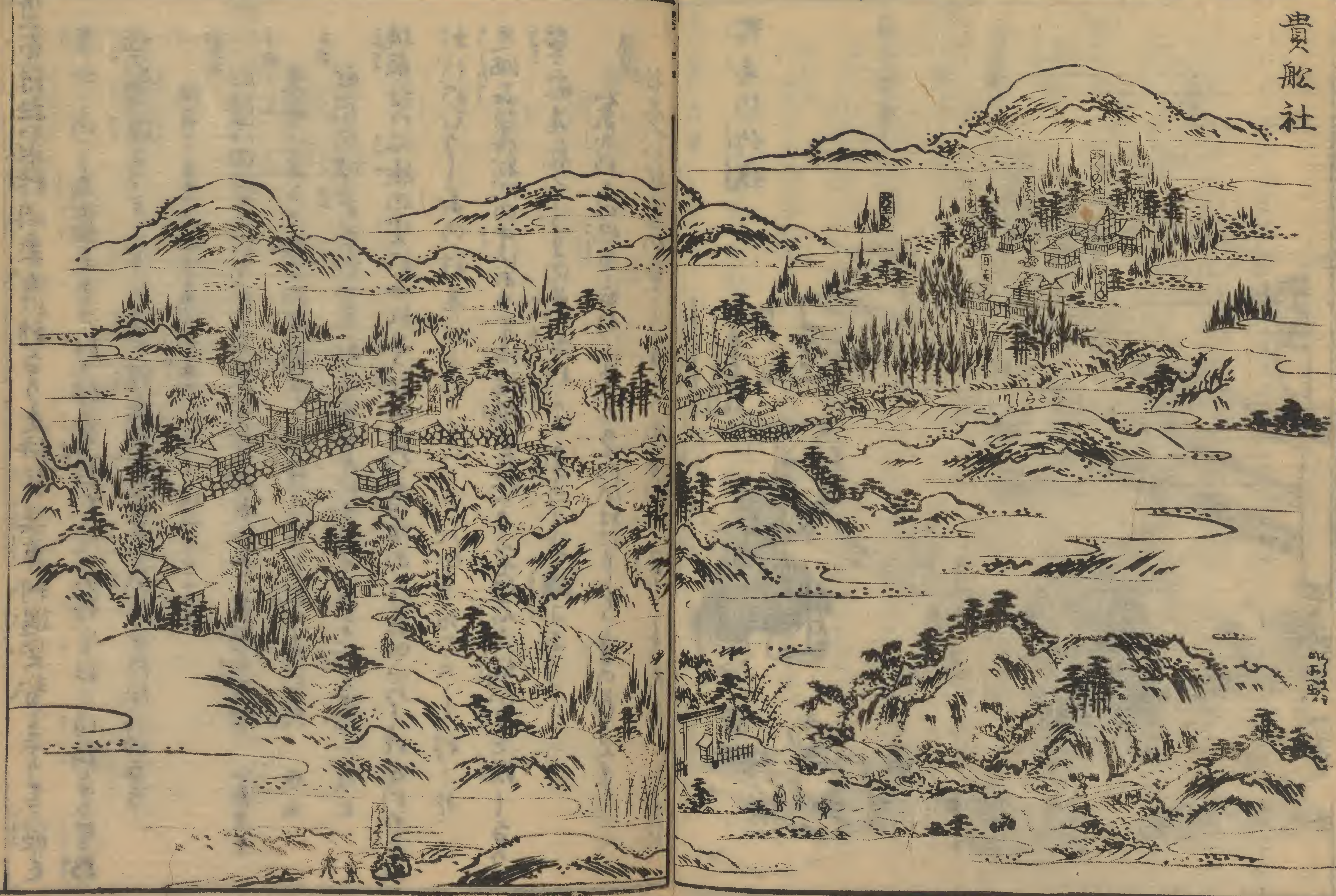


松尾山鞍馬寺と号す。もとハ白鳳十一年天武帝太友王子よ諸和此所にきて
弥のしゆひて鞍をけるなはじめしより鞍馬と名つけ初しより作
しかるハ延暦十五年に大中吉主藤原伊勢人の草創なり。此人佛に帰依する事
たぐ勝地を求めかく精舎をいとなみ観世音の像を安置せんと思ひに居り
ある夜の夢に洛北の山頂に至る白髪の老翁あらはれて曰く此山
天下にならぶなく形ハ鞍に似たり。〇叡雲たなびく此山に精舎を建
立せバ利益無量ならんと告て失ぬ。夢さめて名を貴し王城の鎮護大社
なり夢覚て何ぞの所も志つてありたれバ久しく飼る白馬に鞍を掛ひ
むかし摩騰法蘭ハ舎利経像を白馬に乗せ震旦に来りしを思ひ
霊畜なりと決定て其の跡をしたひしてぞ者と放しけるに其
馬の小ずる山の頂に至り草中に足を止りぬ。童帰てそれより吉主是を
見てなかなかに叢林に毘沙門天の像ありてこそ清浄なり。別に一
宇をいとなんで此像を安置せりされども観音の像を安置せんと思ひける

とげざりしよしなげく。又其夜の夢に天童来りて曰く汝多門天と観ハ
観世音と称し本来観音と多門天ハ名ハ異なれども同一躰なりと覚て後
願ひ今ハ元りと観音をせり。又一宇をいとなみて千手観音を安置し今
の西の観音院是なり。正月初の寅の日諸人群参をなすハ毘沙門天
十種の福をあたへ又参人賽銭をあけて貴人より下人に至る迄利潤を蒙る事を
願る事を縁とよりて此日参るなり　六月廿日の竹伐といふハ当所の僧
人本堂と西の観音堂に集りて一丈ばかりなる青竹を双方に立て本
堂ハ近江方観音堂ハ丹波方と名付て一山の院坊法莚を催しまた相
負を合せかの竹を三段にきりて堂を下り一の曲切石にまくりて足う
任せて走りゆく早きを勝とする也。此来由ハ往昔南都招提寺の鑑真僧正
此山に分入りし時雌雄の大蛇あれてちかきを疾る僧正にかなく祈念
ありければ一つの蛇忽に滅びたり。今一つは向ひてたふようにして人を悩する
なく又当山の閑かなるぐく経きたすなきと此蛇を放やこうきとなりて〜より

本堂の下より閼伽水滔々として涌出今にたゆる事なし是を竜の口といふ
蛇なる事ぞくし人皇を歳きりて魔を払ふなり故又夜に入て其徒を集め人を堂
の中に座せしめ院元法力をいかり殺し又祈請するあり世の俗人よかゆ多く
毘沙門天法を行ふ経若の人は沒を止べき時にも苦の入寿の不思議のみとも
多かりしに秘してかゝず次
靫明神は当山の氏神にして大門の右の方にあり祭る所大己貴命
一座なり朱雀院の御時天慶年中に勧請ある由本と号する毎年天子此
御悩のかひは世のさわがしきとき靫を此社にかけらるゝなり　例祭九月九日
座石焼炭木芽漬は此所の名産なり羅を以て賞翫す世に名高し
今桜　鞍馬の山の花桜の枝わかれなきものかは　顕季
足やこの鞍馬にまつはる桜の山にさけるなるべし　定兼
袖中抄云　唐鞍は唐鞍に似たれは鞍馬の名を云なりとぞ
僧正谷は源牛若丸鬼一人に遇合刺撃の法をならひしところなり




貴船社

貴布祢社ハ水神なり夫伊弉諾尊軻遇突智をきりて三段とし
其ひとつを高龗となしそれよりけるこの垂迹ハやましろの丹生社と同躰なり
徒の陰迹ふしく今も雨を請ひ晴を祈るものハ此二神なり

新古今
社司ども貴布祢に参りて雨こひせしはんべりける
おほ御田のうるほふはかりせきかけて井せきに落せ川上の神　加茂幸平

千載
貴船川玉ちる瀬々の岩波に氷をくだく秋の夜の月　俊成

玉葉
秋風の吹くくれハ貴船山声をかはして森そ鳴なる　成助

梶取社ハ二瀬の里より北に貴船の一乃鳥居あり其かたはらに芹川あり是
神代のむかし貴船の神本宮よりきたりし時梶とりし神なり
足洗石ハ本宮貴船川の中にあり宇治橋姫貴船へ詣て此石に休ひ足を洗ひしなり
螢石ハ本宮くらまの落合川より南にして壇にあり

後拾遺
和泉式部夫の保昌にわすられて此社にまうて螢の飛をみて
物おもへハ沢の螢も我身よりあくがれ出る玉かとそ見る　和泉式部

とよみけれハ御社の中より男子の声にて

後拾遺
奥山にたぎりて落る滝津瀬の玉散るはかり物な思ひそ　貴船明神

式部そのゝち巫をかたらひ保昌がわれにかへる事をいのらしむ社の
木陰に立かくれてゐたりしに巫とする事にてあまりにみたりかはしきと
云へハ式部かくそよめる
千早振神のみるめもはつかしや身をおもふとて身をやすつへき　和泉式部
とよみけれハ保昌きゝてもあはれと其心ばへ優にやさしく思ひて
則式部をぐしてかへり浅からぬむすびしとなり
暗部山ハ貴船の奥なり日神岩戸にこもりましゝ時世界闇く
くらやみとなりし故暗部山といふ

古今
梅花匂ふ春べはくらぶ山闇に越れとしるくそありける　貫之
大悲山ハくらまの遥奥なり花脊原地上下村にあり又別所村にあり観音堂あり
平相国清盛のいとなみしとなり


西加茂（ニシカモ）
毎年七月十六日送火として船のかたちを焼をたくもそのゆゑなり
正傳寺
藥師山
靈源寺
神光院


鷹ヶ峯
岩屋山
岩門

岩屋山金峯寺は満樹峠の北にあり本尊は不動明王也此山は古へ蔵王菩薩現じ給ふ霊場也開基は役行者又弘法大師も此處にて密法を修し給ふ所なり桟敷嶽は岩屋より一里ばかり北にありて惟喬親王桟敷をかまへ給ふ幽居ありし所なり

西加茂神光院は開基弘法大師みづから自作の像を安置す（同作の像を安置す本尊）
愛染明王は弘法の作也（毎年丑の月丑の日には参詣人群集をなす）

同所霊源寺は後水尾法皇の御願にて開基は佛頂國師本尊は釈迦佛（日本より入唐の時の念持仏）
後水尾帝の聖像又開山の像を安置す辨財天社（東福門院の御寄附の神像也）撞鐘堂（大仏殿金仏の御首を以て鋳立し鐘あり）

吉祥山正傳寺は同所にあり禅宗にして開基は東岩宏光禅師也一山に楓樹多くありて紅葉の頃は千枝爛熳として楚岸呉江といふべし

舩の送り火も正傳寺のうしろの山にあり例歳七月十六日の宵に此所にて舩の形に火を焼聖霊会の送り火とするなり

薬師山は草堂をむすびて瑠璃光如来を安置したまへり伽藍厳重にして傳教大師みづから作り給ふ（今尼寺となる）

鷹峯寂光山常照寺は法華宗の檀林なり開基は日乾上人なり

同源光庵は禅宗にして卍山和尚の開基なり

同光悦寺は法華宗にして本阿弥光悦の営し所なりそのはじめ太虚庵といふ羅山先生此庵の記をつけらる（羅山文集）

同題目堂此奥にあり常行題目を唱へてやまざるなり

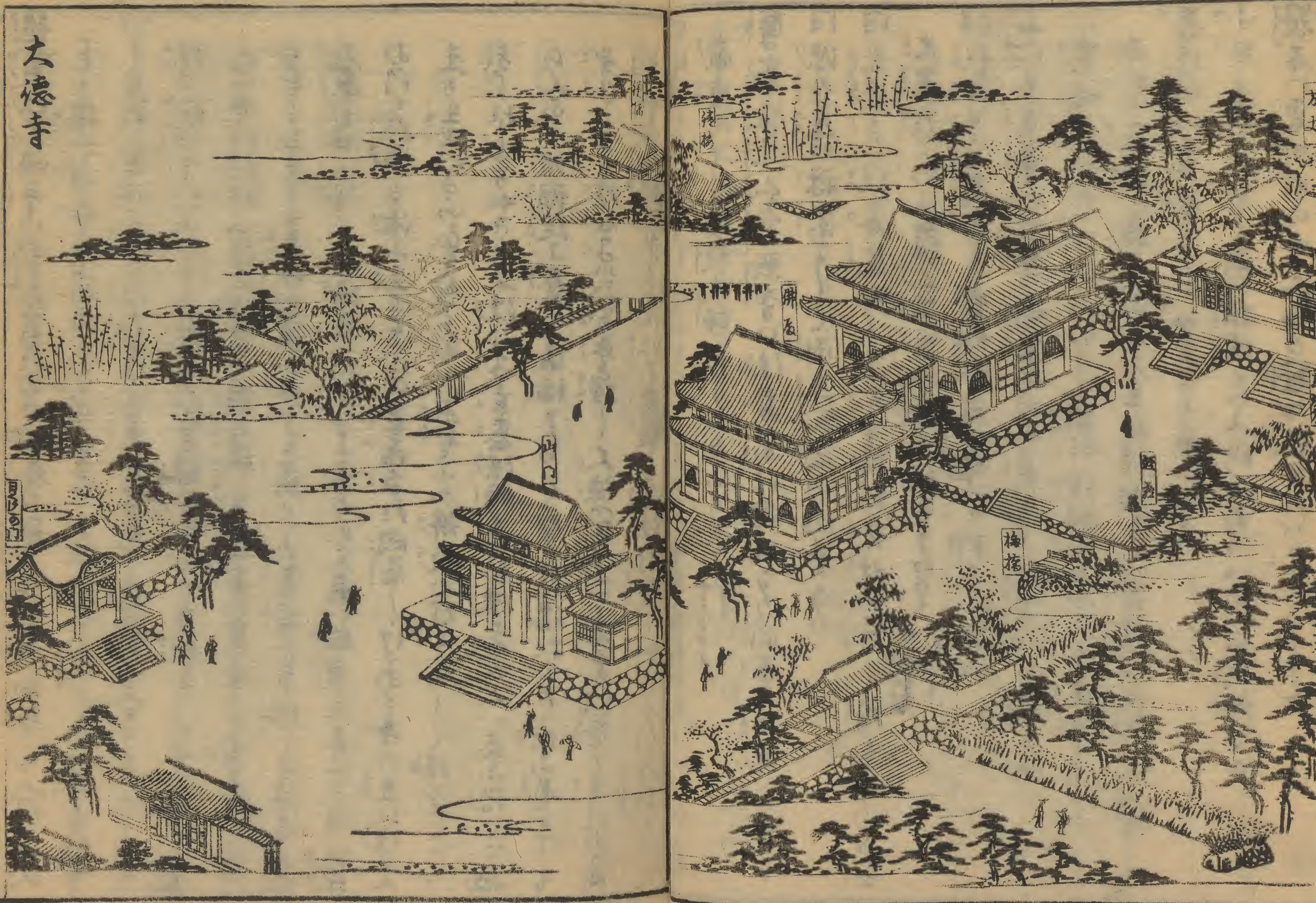
石門とは峯北にあり両岩あひ向て其高さ数丈門を構ふが如し

霊巌寺は石門といふ地にあり円行法師入唐して青龍寺の義真に両部の密教を授て承和六年に帰朝してそ霊巌寺を開闢しこの山に庵を

菩提瀧は鷹峯より一里ばかり西にあり

小野道風のやしき跡は杉坂といふ所にあり此所の氏神なり

冠石は東河内の中にある冠の形すれば名とするなり


大徳寺
山門
佛殿
法堂
方丈

龍寶山大徳寺は今宮の南にあり。開基は大燈国師、名は妙超といふ。姓は紀氏
もと播州揖西郡の人也。父母子なきを歎き書写山の観世音に祈り
しがある夜母の夢に異僧来りて華をあたふると見て孕みぬ
妊り妙超生れて仙骨そなへ眼光やさしく異相にして十一歳にて書写
山の戒信律師に従ひ経書を読み九流三教百家の異道まで窮めて
もろこしさきへ京師相模に至りて弘くの尊宿に参問して後建長の
大應国師に謁し悟道を得て其門子となりぬ。大應は延慶元年十二月に遷化
ありて妙超は洛に上り東山の雲居庵に閑居しける。ある夜の夢に傍に人
来り出世すべしといふ。かくて紫野に入り佛殿をたて、くだしく法堂をつくり
立られしとぞ。さて又禅師玄恵法師其外儒者九人一志に禅宗を破
らんとて朝廷に奏し議論ありしかども悉く師に屈して帰依し
弟子となり、玄恵は入室参禅し、大徳の方丈を建て雲門庵と号しおの所
花園帝御帰依ありて仏法不思議なる王法対坐し勅ありしかば妙超奏して

王法不思議なる仏法に対坐すと勅答せられしより、後醍醐天皇によつて慈
いよいよ深く尊び投機頌を宸筆に拝し興禅大燈国師の號を賜ふ
正燈国師は号をかへ賜り延元二年丑備月廿二日遷化とす。寿五十六（已上大燈国師行状の文をとる）
佛殿には釈迦仏を本尊として梵王帝釈天達磨臨済の像を安置し
門菴には大燈国師の像あり。其外花園院後醍醐院後土御門院の御牌あり
また別に大燈国師の画像も傍にあり
真珠庵は一休和尚ここに住居し給ひし也。真珠庵と一休は筆跡深きの由
額あり。庭に村田珠光和泉式部が丈ある保昌の宅地なりしといふ
當寺の伽藍は赤松円心同じく則祐柱石の料を寄して山門は主に宗
宗長修造し閣は千利休方丈門は明智光秀寄進するといふ
むらさき野は今宮大徳寺あたりの総名なり

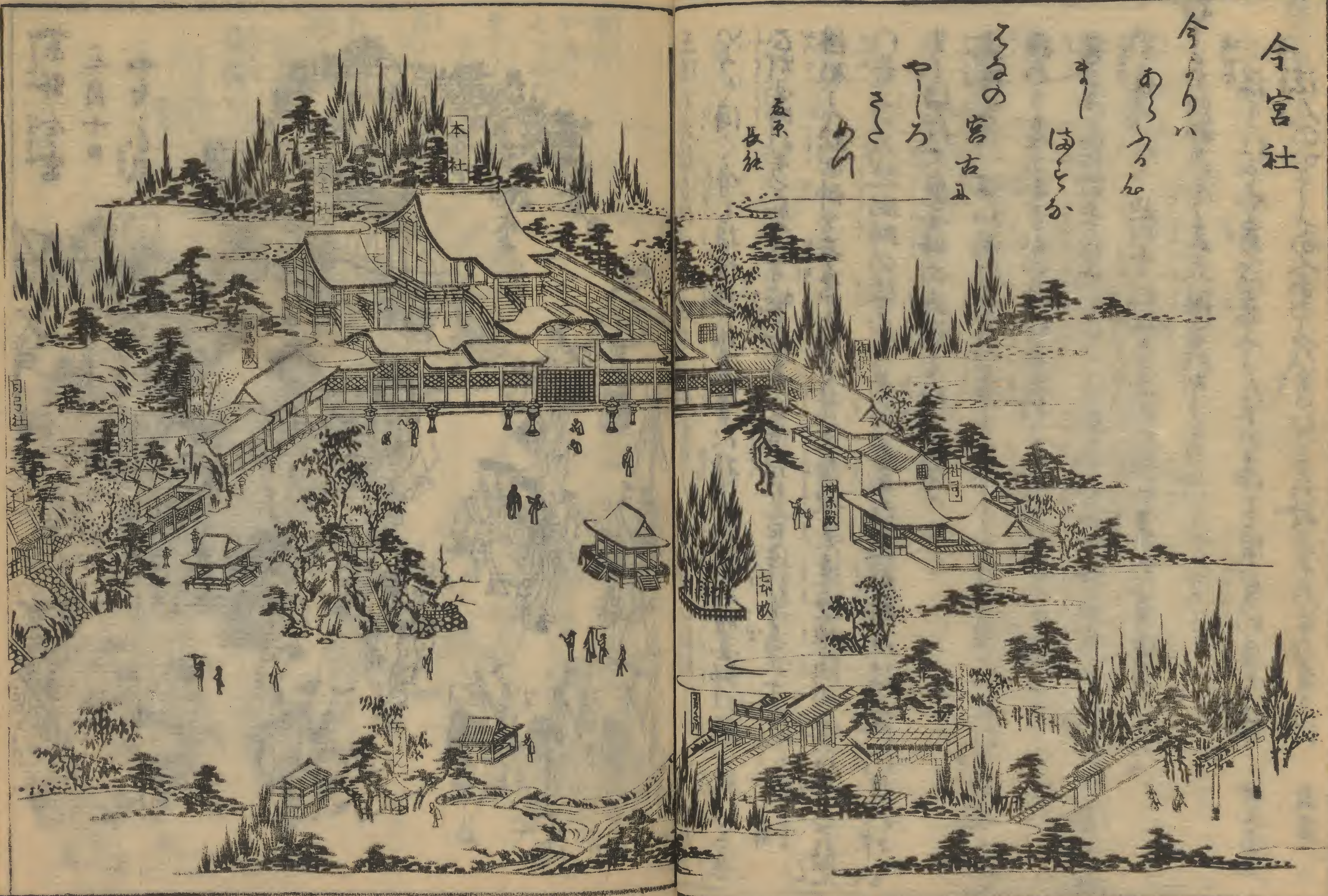
続古今
ゆかりそや妻はいたらん小野のゆかりのむらさきの露　太上天皇

夫木
法人のかざしてかへるひがふむらさき野にてみとりするかな　兼昌

今宮社

今よりは
あらふる心
まします
なはなの宮こに
やしろ
さため
つ

藤原
長能



紫野今宮 三月十日 やすらひ祭



當所と加茂の人々社内をめぐりてやすらひ花よととゞろたわむれ神輿いさみて疫癘とはらふ

今宮の社は紫野にあり疫神社一条院の御宇正暦五年六月廿七日船岡の上
に神輿をつくり御夢告ありて長保三年五月九日此所にうつして今宮と
あがめらる今は牛頭天王を勧請して七二座なり

藻塩
白妙のとよみてぐらをとりもちていはひぞ初る紫の野に　藤原長能

祭は十日より夜須禮祭とて加茂上野の里人烏帽子素襖をきて風流の装束
太刀をはき笛を吹鉦鼓をならし此社にめくりてやすらひ花よと囃し一説
春陽の節ハ必ず疫の神が散るとて人を悩ますゆへ当社をまつれば
鬼を神とし信じこうする雄は神拝するの法会式に各々あつまりて悪
氣をとるぶりんをそ踊とすしかる始ことはやさるゆへにる離は法花会へ出すといふ
ちらしをそやせしとこの法よりやすらひ花とのなをするひ花よりもいふ説あり
御霊会は五月十八日にあり七日は御出して紫野の東よりに御旅所へうつし給ふ
常盤の古跡　義経誕生の所は今宮の東大源庵の傍にあり左馬頭義朝の別館也
常盤此所に住て牛若丸を産しとなり

船岡山は紫野の西にあり船の形に似たればかく名付けり応仁年中此
山に西陣細川山名の両陣数度合戦ありし也

新古今　円融院位さりたまひて後船岡に子日しけるにまいりて

参りつむ人をとふにはきのふの野べのみ由れせましや　二条右大臣

拾遺

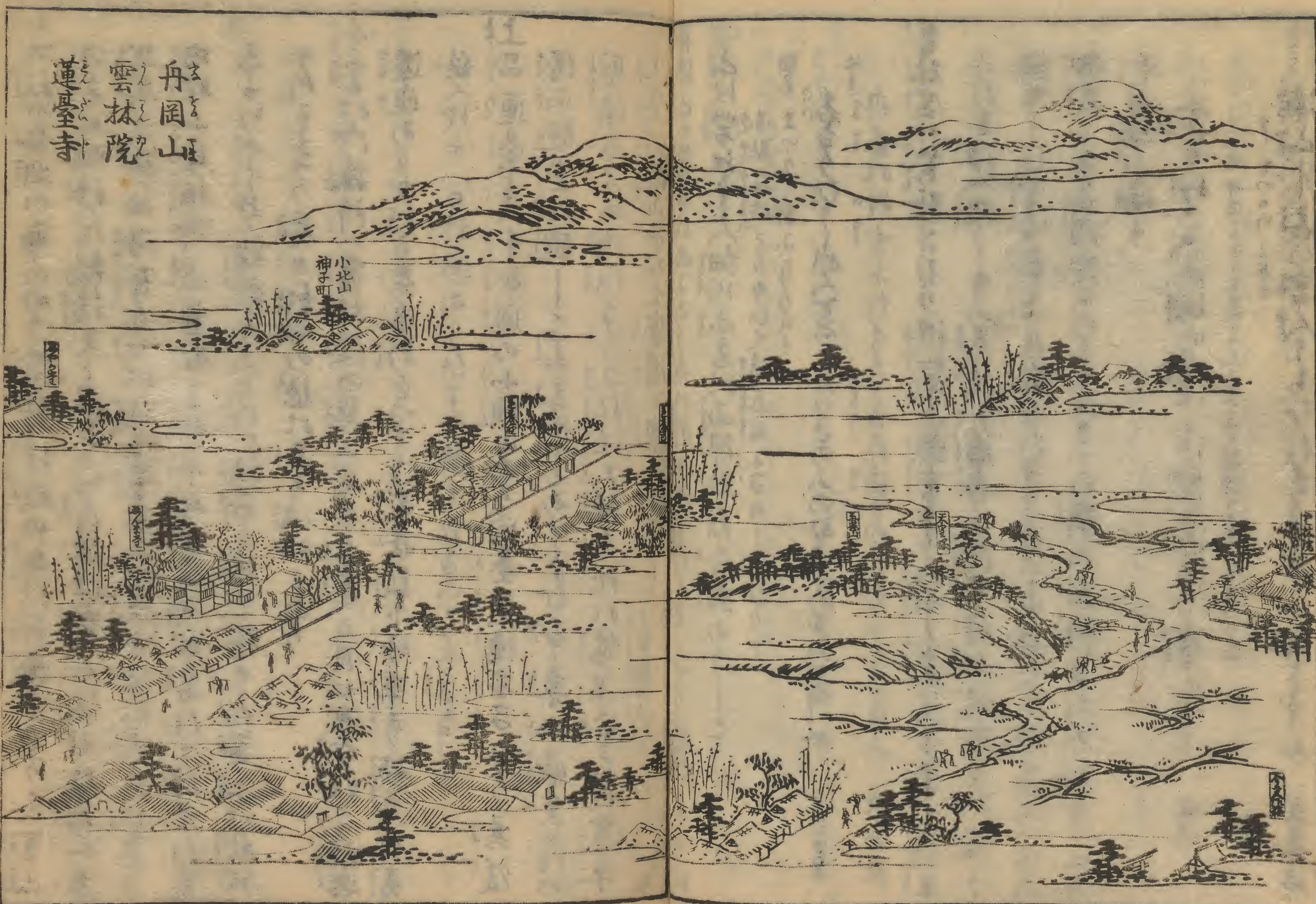
舟岡の野中にたてる女郎花わたさぬ人はあらじとぞ思ふ　読人不知

雲林院は紫野にあり淳和帝の離宮なり仁明天皇の御子常康親王
これを給ひ領し給ふ其後天暦帝の御時僧正遍照を別当に
補せられ堂塔伽藍を建られける今は雲林院と唱へて此あたりの
御名ばかりの旧跡也のこりけるむかしは桜の名所なれど和歌に詠る
雲の林と詠る

今ぞ知る雲の林の星は空にみだるる蛍なりけり　経信

うへの御のこしも花さかりに雲林院にまうでけるに
まうでて侍りけるに

浦山し春の宮人うちむれておのがものとや花をみるらん　良暹法師



舟岡山
雲林院
蓮臺寺

七の社ハ舟岡の南にあり當社ハ深殿の后也祈願によりて三笠山
の春日明神を勧請ましますとぞ其後保安元年稲荷加茂
松尾平野を併せ奉り七の社と号すと又一説に洛の七野あり
内野北野柏野蓮臺野上野平野紫野の中に祭れる神なれバ
七野の社と号す諸願あるものハ社の前の砂を積て三笠山の状を
うつしたてまつり春日の影向の椋の木も此地にあり
今宮の御旅所ハ雲林院の巽にあり毎歳五月七日本社より神輿
遷座ありくだんの茶店前をつらね芝居放下師半弓楊弓の者
絶ずに十八日神輿かへしまで賑しけるはいとにぎはし
上品蓮臺寺ハ千本通の北頭にあり開基聖徳太子なり其後
僧正観空住職して真言宗となさしむ本尊地蔵菩薩ハ
聖徳太子の御作なり又弘法大師自作の像を安置せり寛平
上皇此所にわたりて叡灌を禀たまへし　元亨釋書に

金山天王寺ハ北野社東の門通にあり天台宗にして本尊如意輪観音
ハ聖徳太子の作なり　洛陽観音巡の　其一ケ所　開基ハ聖徳太子にて則自作乃
像を安置せり太子堂の額ハ釋迦如来轉毫光所上宮太子浄蹟
中心と書して小松院の震翰なり
紅梅殿ハ天王寺のおにわりなる所菅神の愛し給ふ飛梅ハ霊神なり
清和院ハ七本松通一条の北にあり真言宗にして聖観音地蔵菩薩
の二尊を安置す原ハ京極通春日にあり今清和院御門と號を
明暦年中に此地に移さる
具足山立本寺ハ旧通正親町の西にあり法華宗にして日像上人の開
基なり祖師堂に安置せる日蓮上人の像を御影といふ初め永享の
比男石清門佐久道が侍に佐々木康次といふ者出陣の時山中に懐りて
出しが落ひ土中に蔵む盗人ありて集んとするに盤石の如し大に惶れ康
次に懺悔して當宗門となり此尊像を仕て終を遂る

千本焔魔堂ハ蓮臺寺の南にあり引接寺と号す宗旨ハ眞言
本尊ハ焔魔大王にして法橋定朝の作當寺の開基ハ定覚
律師と鐘の銘にあり大念佛ハ文永年中に如輪上人と
めすうに此寺の桜に普賢像といふあり弥生の花盛りをもちて
經会をはじむる之一説にむかし篁乃窟の日藏上人冥土より
いたりまへハ帝いまして上人に向ひて宣ふやうハ我娑婆の業
因深くして今猶ましくくるしみを受けり汝娑婆に帰りてそ我
為に千本の卒土婆を供養すべしと一首の哥を添給ふ
いふたらく 極楽の庭に入ぬるまハ刹利も首陀もかはらさりけり
日藏肝脳袖にあまり感涙をとめ給ひて此旨を奏聞して舟岳山よ
千本の卒土婆を建當寺を建立し給ひ供養したまふ之
大報恩寺ハ引接寺の西にあり千本釈迦堂といふ本尊釈迦佛ハ安阿弥
の作也宗旨ハ眞言にして開基求法上人也 毎二月十五日ハ遺教経の法會あり 世人參詣してイキケウくらよ

七野社



轉法輪寺




北野天満宮
十二座社
老松社
八座社
朝日寺
経所
拝殿

北野ハ王城の西北の方なり天暦年中に聖廟をうつし法華三昧の大社とハなし
あまくだりし時諸寮の人陰晴をまうしけれバ往昔より神威あらはれける

小野宮のまへにてよみてまつりける

後撰集
くもりなき世の末かけてまもるらん神ハ天満つくらん　慈円

白川院の御ことにあらはれける時ふりつもりて浄き心も経ん

唐鏡なる小野の宮へまうでゝそのうしろにかきつける

後拾遺
身をはるかで照しけん唐の御鏡にも月のあはれハ　能因

天満天神宮　中殿 菅丞相　中将殿 東間 菅三品嫡子　吉祥女 西間 右大臣小方

菅家の御先祖ハあまねく世の人の知りたるごとくなれバ略しぬ公ハ天穂日命の苗裔にして歴世かしこく是善公の御子右大臣名ハ道真と申奉り
いとけなくして穎悟をぐれ貞観四年に文章生に補し学業すゝみつゝ
同じく十二年に対策及第し十八歳にて侍従にすゝみ元慶六年渤海国
の使者を鴻臚館にてもてなし白楽天に
似たりとかや仁和年中に讃岐守に任じ寛平三年に参議となり六年
九月に吉祥院にて五十賀を催したまふ九年に中納言を経て大納言に任ぜられ
大将を兼ね昌泰二年二月右大臣にすゝみ右大将なりし是時左大臣ハ藤原時平
朝臣時平ともに上皇の勅をうけ天子を補佐し奉りぬ帝十四歳にて
聡明にて位に即かせ玉ひ一日朱雀院 上皇御所 にいたり玉ひし上皇帝に譲
ならびに右大臣年高く才賢しければ任用せられ国を右大臣にて譲り
まゐりたまひ右大臣太政大臣を贈り妹の皇后ありしかバひそかに遷せしまうり
遂に昌泰四年正月廿五日大宰権帥に左遷し玉ふ時に御年五十七歳延喜
三年二月廿五日配所にて薨じ玉ひ安楽寺に葬奉る御年五十九才の其後
菅霊にてさまぐの祟ありしかバ延長元年に左遷の宣旨をやめてもとの官に
かへし正二位を贈り玉ふ天慶五年七月菅丞相右京七条の文子といふもの
御託宣ありて小野右近の馬場に持とのたまふ又近江国比良社の禰宜良種に
託し給ひたりハ太内の小路に一夜に千本の松をはせん社をば天満天神と崇し

ところなんに於て朝日寺の僧最珍右京の父子等と力を合せ霊祠を作り
天徳三年右大臣師輔公も神威をうやまひ殿々をつくり大廈となし給ふ
其後今の小野宮実資一条院の御宇正暦四年六月に勅使を宰府に安
楽寺につかはして太政大臣正一位を贈りたまへり末社に殿の宮といふは一夜の
松なり此祠に神秘の故ありといへり 已上 縁起
二月廿五日は菜種の御供とて御神事あり七月七日は御手洗とて参詣人多し
殿に入神宝虫干あり九月四日当社の祭礼あり
東向観音は元明塔の西側にあり本尊は梅桜の二樹をもつて菅神自ら
きざみたまふ十一面観世音なり
願成就寺は東向松の坤にあり本尊は釈迦多宝仏の二尊なり此寺は
足利将軍義満公山名氏清と内野に於て合戦あり義満討勝たまひて
氏清が首級を得らる氏清は無双の勇士なりしかば其追悼のためにこそ道場を
建立し施餓鬼の法会を興行ありし故に経王堂ともいふ

平野社は北野より乾にあり祭る神四座なり源平高階大江此四姓の
氏神なり　第一今木神 日本武尊 源氏　第二久度神 仲哀天皇 平氏　第三古開神 仁徳天皇 高階氏
第四比咩神 天照大神 大江氏
縣社は天穂日命 中原 清原 菅原 秋篠 四姓の氏神なり昔しろは桓武天皇延暦年
中に建立せり御くらゐは正一位清和天皇貞観六年七月十日にさづけ
奉る例祭は九月上の申の日なり

拾遺
生ひしげれ平野の原のあや杉よこき紫に立かさぬべく　元輔

続古今
難波津よ名さへありせしむすれや平野の松にかかる白雲　家隆

新千載
ちはやぶる平野の松も今日よりは花咲く春のためしなるらめ　[illegible]

紙屋川とつふるはむかし此川のほとりにて紙をすきし故なり
大嘗会の御禊にも此紙屋川の稲と平野の橋よりおこし水にて行ひ給ふとぞ
川は紙屋川の別名なり又仁和川ともいふむかしは仁和寺廣大にして東は
紙屋川のきしまで寺院堂塔多く造りつづけ侍りしゆゑとぞ


平野社
新千載
ちはやふる平野の松も今さかは花咲春れ色めしすらん
兼
小北山


金閣寺
衣笠山
金閣
九山八海石
鏡湖池
方丈
庫裏
安民沢
岩下水
春日社
龍門瀑

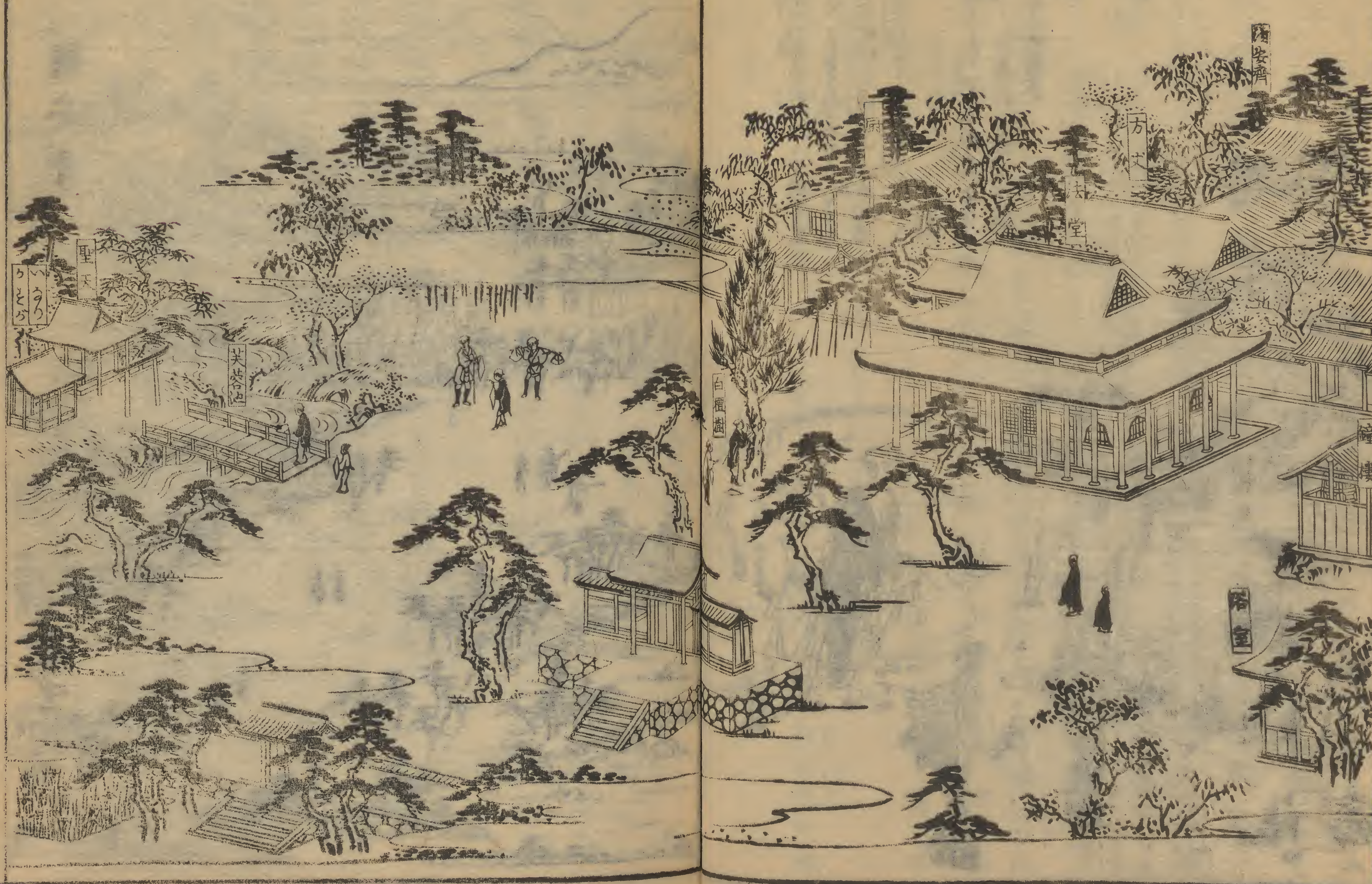
金閣寺ハ北山の麓にあり禅宗にして鹿苑寺といふ
應永四年に将軍義満公 鹿苑院殿也 高閣をたて花美をつくし金銅をもつて
一面に粧ひ閣の前に池を穿ちて九山八海と名づけ備へて奇石さまざまあり
金閣三重にして第一を法水院といふ 鹿苑院殿道義の像あり 弥陀の三尊 夢窓国師の像 第二を潮
音洞といふ 自然木の額書 四天王の像を 第三を究竟頂といふ 後小松院勅額あり板敷三間四面 一枚板四壁の板ことごとく金銅を押す
むかしハ境地ひろかりしが今ハ廣くうしなへり惣門ハ紙屋川の西今の地蔵院の傍に
ありし礎今にあり浄所を芳徳といふ金閣の廻りなる池にして芳徳の名あり
夕佳楼ハ池の畔に拱北楼あり其に小御堂あり東に地蔵堂 安置本体 其
地を地蔵寺といふ其北に大塔あり本尊弥勒方丈の北に一峯あり雅名
と號し西北方の岩に観音地に名をそへられたるなし
鏡石ハ金閣寺の北紙屋川の上にあり石面に明の如く影を写す故
名とせり

東叡眉公
うごかぬ色は名も鏡やかゞみしらん清き影にうつる自らの 貫之



鏡石ハ物めづらしくありてこそ
あかうこそ怪石けぶりなりしかの
磨士に仙人鏡といふ石あり
琢磨大にして石面皎として
みくへの五緯にかけて探る
あかりぞれハ則其形彷あり
かつてぞきこゆるのこゝろ
とかやつたふ

等持院




龍安寺
浴室
惣門
開
方丈
法堂
ちくさ

等持院は衣笠山の麓にあり、
開基は夢窓国師にして足利尊氏公の建立なりしかれば仁和寺の
一院とぞ本尊は地蔵菩薩大聖歓喜天の堂鎮守六請明神等
今に立まさむかしの遺なり等持院の堅額は相国義満公の筆
足利家累代の昭堂は慈照院義政公のいとなみし也證果の額は
開山夢窓の筆なり
衣笠山は等持院のうしろなる山なり仁治年中に内大臣藤原家良公
別荘を建られ衣笠内大臣といへるは是なり

新六帖
てるつきの都のいぬゐ我宿は大内山の麓なりけり　衣笠内府

絹掛山といへるは寛平法皇御室に於てみな月の炎天に御
書の眺望をなし此峯に白き絹をかけさせ雪を見されしとかや
なりといひ傳ふ

小松内大臣重盛公山荘跡の地は衣笠山の東なる麓なり

大北山龍安寺は等持院の西にあり
開基は義天和尚文明年中に細川右京大夫勝元卿これを建らる
初は左大臣實能公の山荘なり徳大寺公有公の代細川勝元此地を乞
請られしより寺となる本尊は釈迦佛達磨の像は東西の壇にあり恵光禅師
像細川勝元の像を安置す堂の内天井の画は東福寺兆殿司の筆也　額 世尊寺
方丈は勝元の館来院をぞうつしてつくる庭前の築山池邊の風色は勝元の
物数寄なり此地は衣笠の山を後にし南は遠く圖て一陽来復より温
気めぐりて早し池の面には鴛鴦むれあそび雲色の眺望を尽し是を
龍安寺の鴛鴦とて名に高し

真如寺は衣笠の麓松原村の西にあり
開基は夢窓国師本尊は釈迦佛仏光国師像　壇下に安ず　達磨佛光
夢窓の三躯　東の壇に安ず　初は無着尼といふ人ここに庵を結て正脈庵
といふ康永年中に高武蔵守師直修造すといへり

妙心寺（めうしんじ）




雙岡
入道一品

正法山妙心寺は花園の南木辻の西にあり開山は関山国師信州の人なり一とせ洛に来り大灯国師にしたがひて衣鉢閣に上り一夕関山玄門に関の字を会得して大悟す玄門大師来りて愛でて関山と号す後醍醐帝乃内に参まゐり志かも尊者によりて其後花園法皇禅苑として関山に住職となし給ふ則法皇も方丈の後に一院をいとなみ住せ給ふ是今の玉鳳院なり仏殿の本尊は釈迦仏 左迦葉 右阿難 達磨臨済 左右 脇壇の神牌 花園院後花園院後土御門院 後柏原院後奈良院 法堂は北にあり経蔵は東にあり玉鳳院は正面に唐門あり額は法皇の御宸筆なり

妙心寺十境 和漢禅刹次第出

萬歳山 仁和寺山
麒麟閣 玉鳳院内
度香橋 南門前
百花洞 玉鳳院内
宇多川 妙心寺の東流
鶏足嶺 小山
高安灘 東外川端
齊宮杜
南華塔 東寺塔
藏稿田 花園 妙心寺の内

双岡は妙心寺の西にあり一二三の岡相並べり

ゐつくにならびの岡の神ね葉秋はさらにゆきくにもみる　後宇多院

はくじ咲双の岡のまへうけに物らじ夕日の色ぞうつろふ　為相

鳴なく蝶のねぐら尋ねまもるしたならびの岡の夜の月影　為家

兼好法師の旧跡二の岡の西の麓にあり近世岡の東長泉寺に移せり

ならびの岡にこゝろ所ありけくにくらうに桜を植させとて

ちぎりおく花とならびの岡のへにあはれいく世の春をすぐさん　兼好

法金剛院ならびの丘にありむかし清原真人夏野の別荘也其子なん仁徳雄公もならびの丘のうへ双丘山荘といふ其後寺として双丘寺としれく已に荒廃に及ぶの所大治年中に待賢門院再興ありて號を法金剛院とあらたむ宗旨は四宗兼学中興は円覚上人なり

本尊は阿弥陀如来 丈六の像春日作とぞ

西光庵は双の池の上にあり浄土宗にして向阿上人開基なり


御室御門前之圖
詞花
出雲

御室御所伽藍（おむろごしよがらん）





毎年二月十五日中九ツ時御堂におゐて涅槃会あり

八十八番宝篋印塔ハ石室へ信心の者経石を納めんことを許す過去を思ふものハ春秋の彼岸中日と七月廿四日殊にそれ供養あり

十月十二日廿一日廿八日御堂におゐてまんだら供養ありまた施餓鬼をとりおこなふ諸宗の法会なりと参詣多し

法名を納めんことを許す四國の内五十六ヶ所の其所へ経を奉じて納むべし周く經すべし

御室御所ハ真言密宗の霊地にして御境内廣大なりそもそもはじめハ
光孝天皇の御願として仁和四年八月小松郷に於て一院御草創
大内山仁和寺と號す其後宇多天皇寛平九年七月皇太子
延喜帝に御位を譲らせ給ひ昌泰二年十月十四日御齢三十三歳
にして御出家ましまし御法諱空理寛平法皇と尊稱し奉る先
帝の御願を継せ給ひ當山に七堂伽藍をつくらひ御室と御造立ましまし
て御入室ありしより御門跡の称号ハこれに始まるとぞ地名に小松つて没
め一流に御室と称す其頃ハ御領七十万石余にして御寺中も
七十七ヶ院ありしに星霜推移にしたがひ其後ハ國々に兵乱屢起
あり御領もあまたが次に廢失し就中應仁二年京都にて山名細川の
争ひはじまりし其前年〈元年〉應仁山名の氏族洛の西に〈今の西陣〉陣営を構へんが
ため民家を放火なせしにかく乱逆の折からなれバ寺院山林に燃うつりて悉く兵
其身命を保ん事もなく其あまたの堂の舊き法場ハあまねく余燼

西の京まで廣ごりしかバ莊嚴花美を尽したりける堂塔一時に
灰燼となりて後久しく荒廢におよび古跡も許々に残りしを
寛永年中御再建ましまし殿堂ありかゝる御室跡に法音より
宮御門跡方の上首にして甚上無法の勅任ましまして今に
宮中に於ても諸宮門跡の内方に混ぜさせらるゝ御規模にてまします
よりかの清御例にて春秋の勅會結縁灌頂毎歳三月
廿又日廿六日に御執行ある 御室御所 其は御室宮など稱しまつる 御室宮 仁和寺宮

金堂 本尊 阿弥陀佛坐像三尺余 脇士 観音 勢至 立像四尺

観音堂 本尊 千手観音立像四尺余 脇士二十八部衆 立像各三尺六七寸

祖師堂 弘法大師 坐像三尺余 御自作 祖壇たり
寛平法皇御宸影御木像二尺余 右壇に性信法親王御影

法皇大御室とも号す 經藏 中央 釋迦佛 左右文殊普賢 五重塔

九所明神 十一社権現 閼伽井 下乗の立札ハ藤木甲斐守が筆

是當山も佳境にして往昔より櫻樹多く殊に山嶽迫りて
渓に嵐はげしく枝葉のまゝにておのづから梢高からず屈曲せり
撓るがごとし故に弥生の花盛りには都鄙の老若緇素容春の錦を
争ひ己が様に幕屏をはり宴を催す松が酒に醉し雪白が眼は青縄
を以て西施の白日を粧ふと得んとは春色の風流花に遊び日ぐれ
帰るを忘る此山は輪なり又後に成就山の林麓より一里余のわたりに旧国
実城遍禮のために八十八ヶ所を遷す近年御再建ありて元来まての御本
尊大師の御安置なり加之金剛界胎蔵界法宝の種字一石に一字を
写し四方の廻りに建られたり此山内を別に寿の曼荼羅男と
いへり其の内に八十八ヶの小堂を廻り遍禮ありて此功徳をもつて二世安楽の
結縁なさしめ給ふ御志厚くやありがたき人々信善して仏
参りもありて其景色ことに勝れし四方の山々を眺望し
拝して特に目を驚かしめ又浄土の荘麗をのぶべきなり

鳴滝は仁和寺の西にあり此所は砥石の名産なり

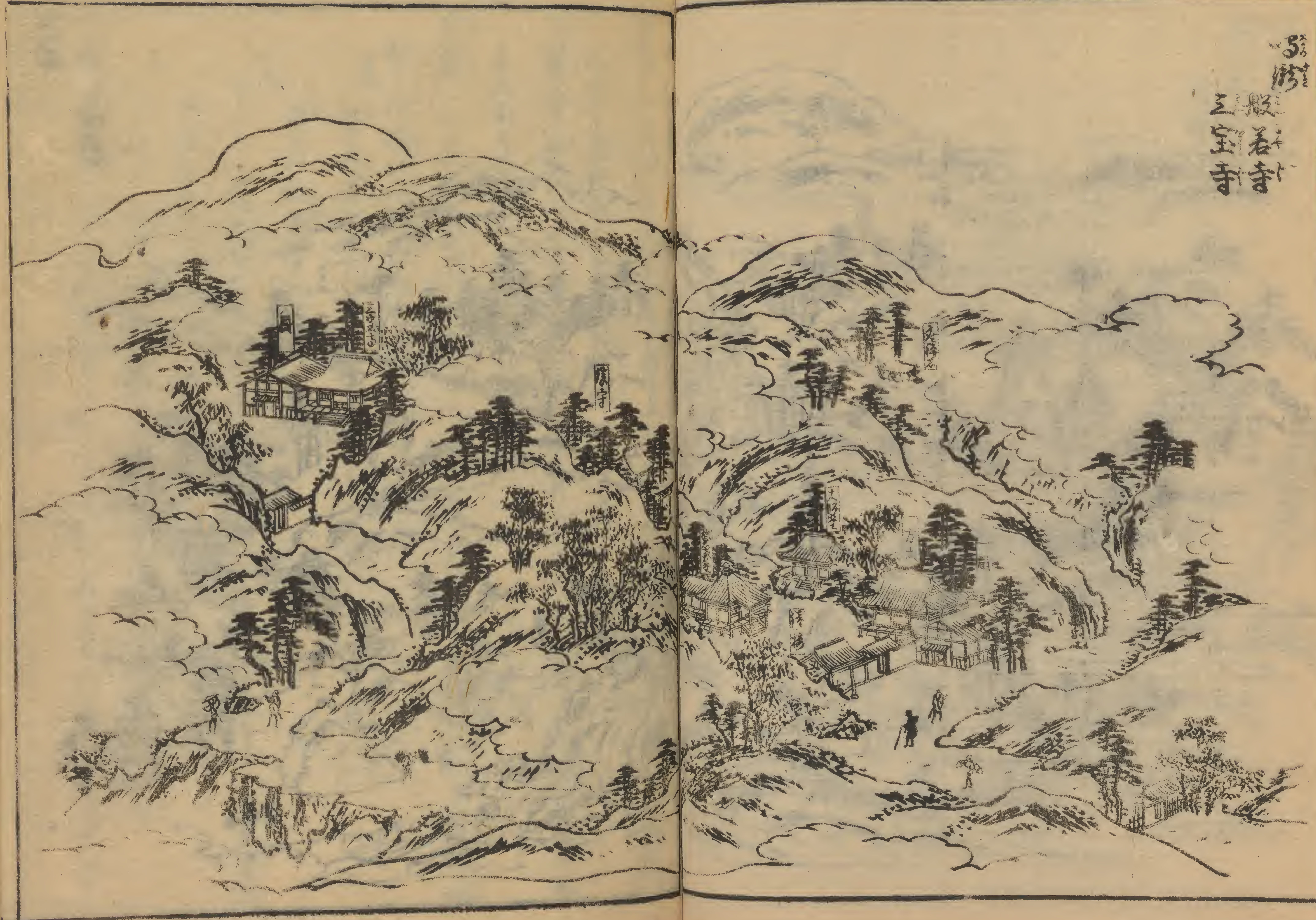
山家

おとにしきつゝみにせりれぬれそて泪やうち滝の川　西行

妙光寺は鳴滝の里の北にあり初は内大臣藤原師継の長男右少将忠季 初名妙光
追福のために山荘を別業とし寺となし妙光禅寺と号す開基は法燈
国師なり本尊は釈迦仏を安ず宝陀閣の額は本庵和尚の筆紫金台
の旧地はうしろの山上にあり印金堂は堂内の四方塔下金紙押なり
当所の荘観なりとぞ

泉谷の法蔵寺は黄檗宗派にして百拙和尚の開基なり此所西南寺と
いふは浄土宗にて本尊阿弥陀如来は恵心僧都の作なり一名あり
五台山には般若寺あり開基は観賢僧正本尊は大江(?)朝是寺あり
宗旨は真言古義にして本尊は文殊菩薩阿弥陀堂には弥陀観音
勢至の三尊を安ず観賢僧正の座禅石は此の寺の山上にあり閼伽井は
堂のうしろにあり


鳴瀧妙光寺
泉谷西寿寺
法蔵寺
山門


弘川
般若寺
三宝寺

五智山にハ又釈迦の如来たゝせ給ふ山上に石躰の五智如来不動毘沙門
石仏をあんちせり皆草弥法師のきざみ給ふなり
三寶寺ハ西の山上にありて日蓮宗なり本堂ハ南向にして釋迦堂へ
上にあり開基ハ日護上人とぞ
泉殿といふハ如光寺と般若寺との間にありむかし高雄院に御子覚性法
親王此所に御室といふ寺を作せ給ひけり

山槐記
如の彼岸に故実のために佛事せんとて泉殿へまいりしに
長尾の松原の末へ路をとくとて

御集
ありしよの松のみとりの其色も憂身に知む涙なりけり　覚性法親王

御茶にまいりつゝぞ

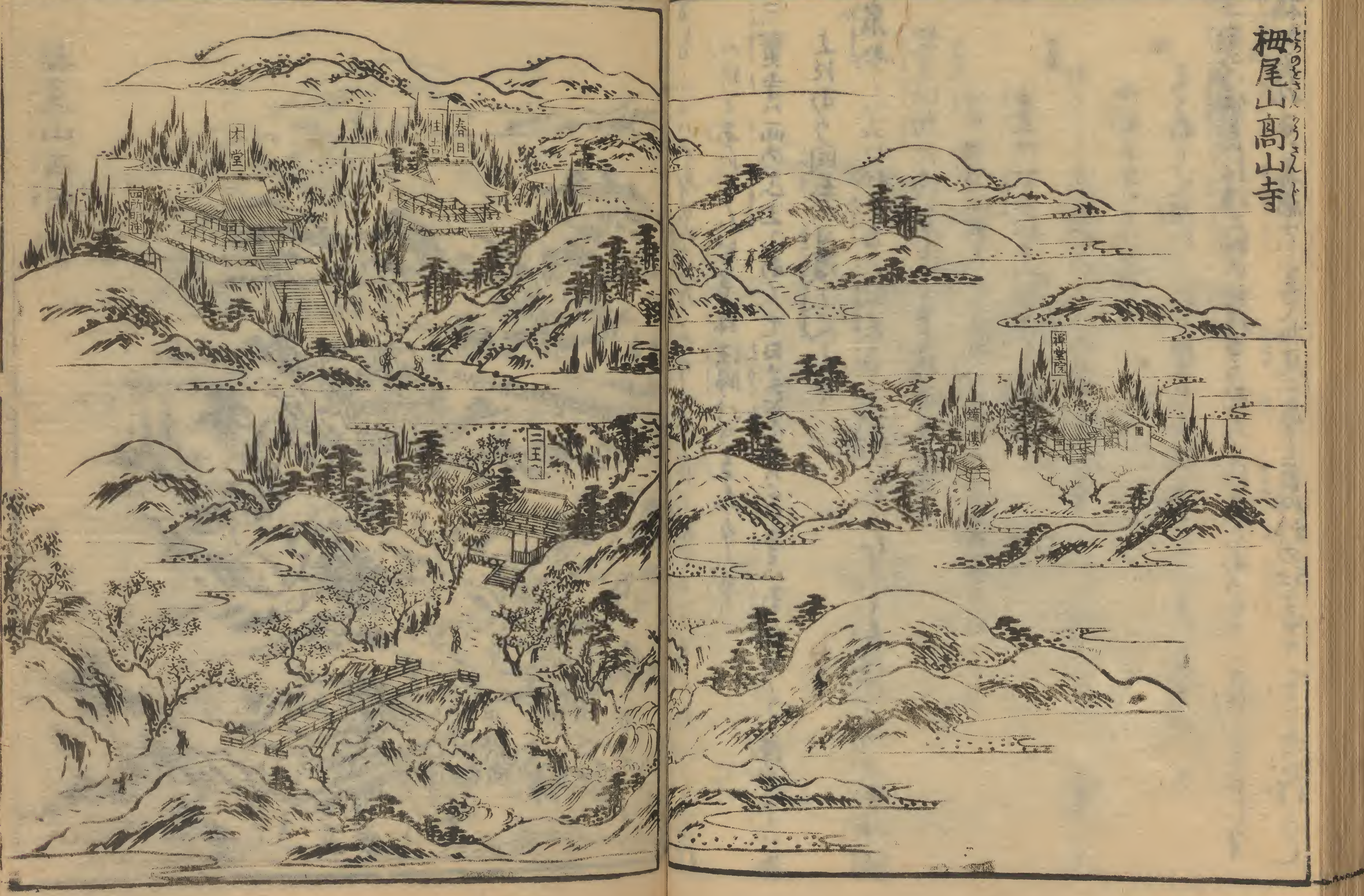
同
これゆくて消にしあと紙きをさへ家に住せぬ庭のまよひか

平岡の八幡宮ハ弘法大師の勧請なりかくらに大石あり里人山神ともいへる
梅畑村なるハ真言宗にて栂尾に属す若宮神の社立せり人里に真言堂あるらし

鳴瀧
五智如来



栂尾山高山寺




槇尾山西明寺
新後撰
雅経



高雄山神護寺
もみぢ葉乃
色くらめて
はな
のちのみのり
江戸れたか雄も
京のたか雄も
浪速
國丸

栂尾山高山寺ハ華厳宗にして本尊ハ釈迦如来明恵上人の開基也紀州有田郡
の人なり九歳にして高雄山の上覚に従ひ倶舎頌をよみ密宗を学ぶ
華厳景雅にならひ又文殊師利に帰し日々に九字呪を誦し十八道を習ふ
東大寺の戒壇に於て受具し興然阿闍梨にまなび両部の密法をうく
また栂尾に住し賢首宗をとなへ又和歌の道にも名高く自遺心集と云を書
あつめ給ふ勅撰にも上人の歌あまた入侍りぬ寛喜四年正月十九日寂に
槙尾山平等心王院ハ真言律にして開基ハ智泉法師なり本尊ハ釈迦如来
明恵上人の作り玉ふ千手観音ハ聖徳太子の作とぞいへり
高雄山 てらさん [illegible] 推 經
高雄山神護寺ハ光仁帝の御宇和気の清麿奏聞し建立ありて初ハ
神願寺と號しぬ淳和帝の御宇天長二年に空海に属して神護国祚真言寺
とあらため号に其詔を下して金剛定寺の額を空海和尚にかゝしめんと
勅使をたゝせ給ひけるに折ふし五月雨にて清瀧川の水増りて高雄山へゆきて
止まりて勅使ハ川のかたはらにたゝずみたまひ筆に墨ひたしてこれを空海にわたし
やりして筆に墨をふくませ持ちながら額に向ひて投げけれハ墨勢あざやかに
額の面に忽ち金剛定寺の四字現れる（大師行状記に見えたり）額書石（石の面に窪あり硯石とも楼門の前にあり）
金堂の本尊薬師如来講堂の本尊大日なり弘法大師の作楼門の
額ハ仁和寺覚信法親王の御筆納涼坊にハ弘法の像安置す文覚上人
の画像もあり鐘楼ハ金堂の艮にありて鐘の銘ハ菅原是善卿序の詞ハ
橘広相筆者ハ藤原敏行なり是を世に三絶と號す本朝の名器なり
して又あるとのみとし八幡宮ハ経蔵の東にあり護法のやしろハ和気
清麿の霊をまつるなり
此所ハむかしより紅葉の名所にて其奥の地蔵院より下る渓をとがのをにいたる錦色
立田の秋の色をひさしれぬ紅の葉の色日にやかれあくしれるくれなゐの錦を
さらすとて詠るもあひやうれ停車坐看楓林晩といへる杜牧が詞なり

都名所圖會巻之六大尾

古今遷建曰帝都天子之居天子以
四海為家豈有常處哉惟其所在即
以為都都者人之所都會云爾以衆
大而言謂之京都周公相成王都洛
邑諸侯藩屏四方朝明堂後漢李唐
亦都洛陽微

本朝聖主之例以京師稱洛陽歟抑
平安者天下之中而有徳無窮之都也従
長岡之遷都已来歴千載而賢聖在
位景星見於天由是庶民浴泰平之化予
時遍覽四方山川之勝裁配畫工信繁
令摸之還尋昔人之経蹟詳記其由縁
全之名曰都名所圖會嗚呼聆左思

之傅才蜀都賦歷年所況予撰不渉年
寡聞浅識伊雪其耻後君子正遺漏
俟滌洗而已季秋十三夜於斑竹亭書
旹安永九年也

選者　平安　秋里湘夕

浪花畫工　春朝齋竹原信繁

彫工　京壬生村住　永島六右衛門

安永九年子中秋

書林　大阪心斎橋通唐物町　河内屋太助梓